2011年度（第13回）学生懸賞論文「女性学インスティチュート賞」

総　評

米　田　眞　澄

今年度「女性学インスティチュート賞」に応募された論文は3編でした。芝田裕紀子さん（GH1116）の「両親の夫婦関係とその娘の配偶者選択との関連」、前田侑子（GH1113）さんの「女子大学生における高齢者との交流が養護性（nurturance）に及ぼす影響」、そして、宮本佳奈さん（GH1114）の「親からの被受容感と娘の対人関係に及ぼす影響」です（応募順）。残念ながら、今回は、最優秀賞、優秀賞ともに該当者なしとの結果となりました。選考委員の先生の講評と選考委員会での議論を踏まえて、総評します。

芝田論文は、両親が良好な関係を持っている場合、その娘は父親のような男性を配偶者として選択するという仮説をたて、未婚者と既婚者を対象に調査を実施し、その仮説を検討するものでした。両親の夫婦関係が娘の配偶者選択にどのような影響を与えているかを探る点で、ジェンダー・スタディーズの視点があるとはいえますが、ジェンダーの論点との関わりが低いのが残念でした。両親の夫婦関係について「よい」と判断する明確な尺度についての説明が必要だったのではないかとの意見も見られました。

また、両親の夫婦関係がその娘のパートナー選択に影響を及ぼすという局面をとりあげた理由についても十分に説明がされていなかったように思います。恋人が父親と似ているか否かを判断するときに、父親と恋人との年齢差に対してどのような配慮がなされるのかという点も気になりました。ただし、被験者が、既婚者である学生の母親、未婚の学生（恋人あり）、未婚の学生（恋人なし）と多様であり、結果についても違いがみられているが、被験者の設定に関する問題点については述べられているので、実験デザインに問題があることは本人も理解されていることがわかりました。父親との類似性について、表面的な要因（容姿）と潜在的な要因（金銭感覚など）を同一に解析している点に、疑問

があるとの意見も出されました。全体として、文章は理解しやすいですが、考察が浅く不十分である点は否めないと思います。

次に、前田論文は、親性を構成する重要な要素として考えられている、養護性という概念を取り上げて、高齢者との交流や高齢者への肯定的イメージが、養護性を高めるという仮説をたて、女子大生への質問紙調査を通して、その仮説を検討するものでした。先行研究については、よく調べられていました。しかし、本調査対象が女子大生であり、さらには彼女たちが高齢者イメージとして多くの場合想定したのが祖母でしたが、もし調査対象を男子学生にしたら、あるいは、高齢者イメージとして多くの場合に想定されるのが祖父であったら、どのような結果が予測されるのかについてまでの言及はされておらず、その意味で、ジェンダー研究の視点が十分にあるとはいえませんでした。また「高齢者」と一口でまとめているが、その状況はかなり多様であるにもかかわらず、その点への配慮が欠けているように思われました。例えば、調査対象に挙げられた祖父母は70歳前後で、元気に仕事や趣味で活動的に過ごす人も多い年代であり、そういうタイプの高齢者と要介護の高齢者の差異に配慮しない方法には疑問が残りました。

ほかにも、養護性を測定する質問紙の内容が、子どもに対する養護性を計るものであり、これを高齢者に対する感情にできるのかについて疑問があるとの意見が出されました。仮説１で高齢者との交流が密であるほど養護性が高まると、主に過去１年の体験をとりあげて調査していますが、養護性が発達段階で育成されていくものであるとすると、それ以前の体験、例えば、幼児における祖父母との体験などは、本研究ではどのように考えられているのかについても疑問がありました。共分散分析の結果をパス図に表しているが、観測変数と潜在変数の表し方の原則に従って書けていないとの指摘もありました。

宮本論文は、青年期における両親の受容的態度の認知が、娘の対人関係、特に他者への依存や群れる志向性にどのような影響を及ぼすのかを検討するものでした。先行研究の整理がわかりにくいとの指摘がありました。概念の整理に

終始しており、研究テーマに関する論点である、「親子関係が青年期の人間形成に及ぼす影響」などの既存研究において、どのような論点があり、まだ十分検討されていない部分は何か、本論がどのようは理論的貢献をなし得るのかが十分に説明されていませんでした。

形式は調っており、論文の構成もいいが、特定な用語については、明確な定義とさらなる説明が必要であると思いました。また、依存を測る尺度として用いている質問紙では、誰に対する依存なのかが特定されていないという指摘もありました。また、パス解析ではなく、重回帰に近いが、パス解析をする必要性が本当にあるのかという意見もありました。今回の分析では、先行研究や本論の問題設定に対して、有意味な結果があまりみられませんでしたが、今後の展開に期待したいと思います。

惜しくもどの論文も受賞には至りませんでしたが、積極的に応募してくださった姿勢を高く評価したいと思います。これからも、多くの学生が懸賞論文に応募してくれることを心から願っています。